

油繪の賞鑑

黒田清輝

油繪と光線

- ▲油繪の需要が増加したは、事實ながら、基く所は之に對する趣味性の發輝と云ふよりは、寧ろ建築の洋風化に伴ふ自然の要求でありはせぬかと思ふ。然し其内に趣味も出て來る。
- ▲凡そ物の需要は、趣味からするものもあり必要からするものもある、其の孰れから來るにしても、油繪のやうな品となると、人間の本能として、縦し最初は單に必要あつて蒐められるにしてもいつか之を介して自然を味ひ得べく、又た自ら技術の上にも目を着けるやうになつて初めて必要以外に蒐集に或意義が附隨して來る。
- ▲必要以上に出づると云ふは、必竟油繪を賞翫する事になる。偕て其の賞翫に當つての豫備智識と云つて可なる者に『光線』がある。光線を度外しては油繪は了解され難い。光線あつての後が油繪なりと云つて可い。換言れば光線は油繪の生命である。
- ▲レンブラント以來明暗のやかましい主張があつたが、時の變遷につれて、今日では大體に明るい光線を出したものと歸着され、其の明るさの具合を重に色の上で苦心したのが印象派と呼ばれる畫である。
- ▲在來の油繪に革新を與へたに拘らず、印象派が初めて頭を擧げた時には、世間は左して之を珍重せず、又た度重なるにつれて自から飽かれたやうな傾きがあり、且つは年と共に幾分下火となつては居るが油繪を明るいものに

した功績は永久没すべからざるものがある。

▲明るさの加減と其の妙趣は、印象派の畫を俟つて初めて味ひ得る。光線を科學的に研究して、描かれたる目的物の刹那々の氣合を遺憾なく現はす方法は先以て此派の得意とする所であらう。

▲中には裝飾に重きを置いたがやうなものもあれど、つまり鮮明なる光線の描寫に苦心を積み経験を重ねて、所謂現代の油繪の基礎を据ゑるに至つた。

▲近頃は又未來派と稱するものが生たが、此新しい流派の主張にも理屈はある。

▲議論を聞いても複製物に依つて見ても、未來派の視ひ所は活動を描かうとするにある。物の靜止した形を描くやうでは繪とは云はれぬ、又た活動して居る所を描いた^{だけ}では、夫が既に靜止である。依て描く瞬間に眼に入る總ての光線と、之れによつて示されたあらゆる形と悉く羅して一つの畫面に收める。先づ斯う解釋すべきであらうと思ふ。

▲未來派の畫は、一見何が描いてあるか了解し難い。餘りに混雜して居る。併し察するに各種の色や形が組み合つて言ふに言はれぬ麗はしい調和を整へる。此の變化ある光線の快感を現はさうとするのではなからうか。

▲描きあげられた畫は形の辨別に苦しむ點があつても、之を作るが爲めに光線より生ずる色彩の調和に苦心した痕は、深く立入つて究めれば究めるだけ、其處に或る趣味の存するを見出し得る。兎角油繪の賞鑑には光線の解釋に注意する事が必要な條件であると思ふ。

▲印象派を出して後ち二三の新派を生み、今また未來派をも出した油繪の大勢は、今後とも益々多くの派に分れ

るであらう。如何なる變化が湧て生ずるかも測られぬ。さりながら派は繁くなり描法は多岐になつても光線の利用如何が油繪の技巧上の面白味である。

畫題の變遷

▲佛蘭西の繪は、年々のサロンに於て大勢が定まる。路易十四世の頃に初めて之を起した時は、誠に微々たるもので其第四回の目録で見ると油繪彫刻を合せて出品點數僅に百五十點位に過ないが、今日にては新舊兩サロンに陳列される油繪だけでも三千三四百點前後と數へられる。

▲大奈翁の時代に初めて審査制を設けて、此の時以後一段と効果が現はれたやうに聞くが、サロンあつて以來二百四十五年、出品される畫の變遷は、之を世紀に區劃すれば最も分明であるが仔細に見來れば大抵十年を一期として明かに其の變轉が認められる。

▲サロンの歴史を溯ると、初期には歴史畫が多かつた宗教畫が澤山出た、神話を材としたものも多數に見られた。

▲古典派の時代になつては、希臘羅馬のものを描いたでなければ畫でなきかの如く思はれもしたやうである。然るに近年のサロンの目録を見ると、歴史畫宗教畫、謂はゞ以前に全盛を極めたものは次第に減じて代りに風俗畫が多數を占めて居る。

▲兎に角サロン二百四十五年の歴史には、作風の變遷があると共に、思想の變化も亦た著しく目に付く。

▲同じく親子の愛情を現はすにしても昔はマドナが基督を抱いた所を描いて夫れに依つて見る者の満足を買つたのが、今日では漁夫の夫婦が其兒を抱いて、あやして居る所を描いて夫にて宗教畫に對すると同じ神聖なる愛情

の觀念を見る者に味はしめんとする。

▲斯る例は探すに従つて幾何でも出るつまりは佛蘭西其他歐羅巴に於ける各時代の思潮或は嗜好が畫の上に現はれたに外ならず、且つや畫其物も、描法に於て、着色に於て、始終變遷して居る。

日本の油繪

▲佛蘭西は油繪の本場と云つてもいい。此の本場での作品と日本の油繪とを比較すれば、日本物は著しく見劣りがする。スケッチでも見るやうな氣持がする。

▲輕くもあるし、未製品でも見るかのやうな思ひがする。どうしても日本の油繪は西洋物のやうに重々しくない。

▲此の重々しさが缺ける點に於て日本の油繪を全く望みの無いものゝやうに非難する向があるが、是れは間違ひで此缺點なるものが却つて將來日本の油繪の特色ともなるべき素地を形づくるものではなからうかと思はれる。

▲立派な畫題を捉まへ得ぬとか日本人の描いた油繪はまづいとか頭からケナシ付けるのは結局時勢と國民の嗜好とを無視し、又發達を企圖獎勵するの意思の缺乏で、不深切と云はねばならぬ。

▲成程西洋物は全體に於て大袈裟である。建築と相俟つて大仕掛な繪が多い。併し其の大袈裟にものだけが必しも大美術品だと言切り得べきではあるまい。

▲由來淡泊を旨とする日本人と濃厚を尙ぶ西洋物とは反が合はぬ。日本人の頭には、先天的に東洋畫が染み込んで居て、描く者にも、見る者にも其感化が宿つて居る。

▲いやに衒はずに雅致を存すると云ふやうな所が東洋畫の妙味である。従つて日本の油繪は、現今でも幾分國民

性が手つだつて、未熟ながら稍々軽いあつきりした調子が現はれるのだと思ふ。

▲此の軽いと云ふ事が、人の誤解を招く基となつて、評者が一概にまづいと判断するやうである。

▲日本の油繪の特色は既に其萌芽が見える。唯だ未だ世間で之を認めず、又或點までは描く本人も自覺せぬだけである。

▲誰が之を大成するか、また何時になつたらば明に特長が現はれるか、夫は未知數に屬するにしても、日本の油繪は、明るい光線を基として、之に加味するに東洋獨特の高雅なる趣味を以てして、遠からず世の認識を要求するであらう。

▲一口に日本の油繪はダメだと言つて退くるのは、將來を思はざるの甚しいと云ふものである。苟くも油繪が運筆色彩の上から前に述べたやうな味ひを現はし得られるとすれば、在來の東洋畫と左して賞翫の上に相違はあるまい。

▲況して油繪には、光線の上の美感がある。此點に於ては或は在來の東洋畫の上に出るかも知れぬ。

▲そうなれば今のマツイ、ダメ、と言はれて居る油繪は他日吾々日本人の誇とするに足るものと爲ぬとも限らぬ。

掬す可き風致

大喪中は謹慎しなければならぬ。家庭の娛樂もけぼくしい物は勢ひ中止されてゐる。けれども盆栽は娛樂と云ふよりも寧ろ趣味で、殊に先帝には郁子^{むすこ}などを愛でさせられしやうに承る。郁子はアケビの一種で、蔓草だが老大の灌木を見た様である。葉はアケビに似て大きく、固く厚く、五七葉が並んで、一つの大きな淡綠色の光ある葉で、冬も決して落ちないところから常磐アケビなどと云つてゐる。普通は立夏の頃に花梗を出し、六瓣の花が

簇り開く。形は百合に似て五六分。色は白の上に淡紫を帯び、實は楕圓形で、カラス瓜位の大ききで、最早青い實をつけてゐる。昨今の盆栽ものでは萩、蘆、土曜藤の索甲、臺灣の紅藤、臺灣の晝顔、紅千葦、黃金齒菜、金華山の竹、姫石榴、秋海棠、風知草、秋草の水盤ものである。尙ほ檉柳と云つて支那から渡來した樹もよい。是れは葉の形、檜に似て甚だ細く、扁からず、枝も細く多くは垂れてゐる。夏に成つて枝毎に六七寸の穂をしてゐる粉紅花を開く。其有様は小さく簇つてなかくしほに可憐らしい。此花は秋にも咲く。支那の美人楊貴妃が非常に此花を愛したと云ふので、珍重がつてゐる人が多い。深山龍膽も是れからのもので、葉は竹の様に短く圓く對生し、秋の半に莖と葉の間に三五の花をつけ、筒瓣で末が五つに分れてゐる。晝は展び夜は收まる者で青碧の色も美しい。槇櫃と云ふ喬木も春咲いた五瓣の淡紅色が、最早郁子と同じく實を結んでゐるが、是れも秋熟してから蜜に漬けると良い香氣を持つてゐる。細かく刻んだ葉が互生した姿も捨つべからざる風致があるので、昨今の盆栽界では珍重されて居る。

『地球』一五 大正元年八月

未来派が日本に紹介されたのはキュビスムより早く、明治四二年五月発行の雑誌『スバル』に森鷗外が、同年二月に発表されたばかりのマリネットイ「未来派宣言」の抄訳を載せたのが嚆矢とされる。その後、明治四五年三月五日に『読売新聞』紙上で高村光太郎が「未来派の絶叫」を、次いで同年五月に森田亀之輔が、「煙無形」の筆名で「フウチュリズムを紹介す」を『美術新報』一七に発表している。本文献中、黒田の未来派に関するコメントはそれから間もないものであり、「洋畫の新傾向と研究の態度」(本書五四四～五四七頁)でのキュビスムへの言及とあわせ、すでに画壇の大御所ながら西洋美術の新動向へいち早く反応を示す姿勢は興味深い。未来派の日本における紹介については、浅野徹「立体派、未来派と大正期の絵画」(『東京国立近代美術館年報昭和51年度』昭和五三年三月)を参照。